

日本科学未来館 館長

## 毛利 衛



日本科学未来館にとっての平成21年度は、国の科学館として一段と厳しい役割を課せられた一年でした。

私たちは、館全体の運営の効率化と収益増、民間の活力を導入することなどを積極的に試みると同時に、果たすべき業務の質が低下しないよう「初心に戻る」を合言葉にミッションを遂行してきました。

未来館事業の大きな柱の一つである、科学コミュニケーターの育成事業では、未来館が輩出する科学コミュニケーターの定義や目標を再確認し、研修内容に反映しました。また館内で開発した展示手法を外部に普及する活動にも力を注ぎました。特に中国への企画展の巡回は、中国各機関とのつながりを強固にし、未来館はアジアの科学館の拠点としてさらなるリーダーシップを期待されることになりました。

趣向を凝らしたイベントを数多く行なったのも21年度の特徴です。日本の陸地で見られる皆既日食としては46年ぶりという、稀有な自然現象を共有する機会を提供し、平日にも関わらず大勢のお客様が未来館を訪れてくれました。さらに企業の協賛を得てのオリジナル企画展では、食という身近なテーマで先端科学を紹介し、中高年という新たな層の関心に応えました。こうした数々の活動の成果として、21年度は過去最高の来館者数を記録することができました。

「事業仕分け」も大きな試練でした。その結果を受けさらに厳しい予算になりますが、未来館がより一体となった活動も可能となりました。この環境を謙虚に受け止め、社会や民間企業とのかかわりを深めつつ、国の科学館としてあるべき姿を着実に実現していきたいと考えています。